

## はじめに

小学2年生の夏。黒板の前でチョークを持って遊んでいた。まきうんこの絵を描くのが得意でした。今日はとびつきり大きいのを描いてやった。クラスメイトの子が「うまい！」とはやしたてる言葉に、調子にのって湯気のマーク3本を勢いよく書きあげて完成させた。渾身の絵ができた。その日から、「うんこ」というあだ名ができた。かわいそうと思った子が「えんこ」と読んでくれた。いまさらながらその子の愛情を感じています。

うんこは身近にありながらどこか「美」と「うんこ」は切り離せないという思いが湧いていた。うんこは好きなもののひとつだ。いつも一緒にいたいというのとはわけが違う。うんこから本当の美しさというのを考えさせられました。そんな美との関係性をこの年まで考えて暮らしていました。ちょっとした変態です。誰にも理解されなくてもいいけれど、私は私の考えを受け入れたい。経験の中からは思いもしないことが心の深いところにある、どこか「美とうんこは正しい」という感覚がいつも共存していて、その子との対話をしてきたのだと思い出され

ます。

大人になって選んだ職業は2つ。会社員と占い師でした。もうひとつなりたい職業にあるのは作家でした。まったくわからないヘタレでもいいから思いを表現したいなどと考えていました。占いを学びはじめて占いをメインの仕事にした5年間。順風満帆ではなくて、その間に4度引越しました、事あるごとに場所を変えて気分を上げることになりました。お金が入るのも使うのもあつという間でした。

占い師として成功しようがしまいが、なんだかんだいっても、今好きなことをしたいという思いは、5年前からは変わりませんでした。会社を辞めるときも、トップ占い師を辞めることも、背中を押しているのは、もう経験したことは手放そうという気持ちからでした。占い師の最前線にいたほうが収入の面でも恵まれます。お客様には頼りにされ、当たったときは一緒に喜び、うまくいかなかったときは一緒に悲しみます。手放すタイミングはいつも突然やってきます。

本当にやりたいことをやろうと思うときは、強く感情を動かされます。数年前から少しずつ叶

えてまいりました。まずひとつは家を持つことでした。田舎に家を買いました。その場所は海が目の前で望める場所です。まあ、夢がひとつ叶ったわけです。今度は山にも家が欲しい。その場所からリモートで占いをしたり占いのコンサルティングをしたりすることやライブ配信することが夢です。猫も飼うことができたらしいな。動物は難しいかな、独り身には。そんな具合におひとりなりの具合の悪いこともあつたりします。

三人兄弟の真ん中として静岡県清水市で生まれ。数年後、父の実家である岩手県一関市に移り住みます。いつからだろう「先生」と呼ばれることがうれしかったのです。小学2年生のころの記憶がこの先の人生にこれほどまでに影響を与えているというのは不思議なことのひとつです。この本を書く機会をいただいて、自分のなかの課題が解消されるような気持ちになつているのも事実です。2011年の東日本大震災から生きることになった。

占いに必要なことはかつこよさだと思う。占いは何も特別な人ではないし、お客様よりも偉いわけではない。占いはどうしても「先生」と呼ばれることで、しっかりしなきゃと思われる方が多いように思う。そもそも先生と呼ばれる人格になるまで時間がかかるもので、多くの人から悩みに対する本質を学ばせていただくことから始まるのでしょう。みんな悩みは

ある。悩みを悩んでいるわけではなくて、困っているのはその悩みに応えられない自分が困っているのです。

占い師は占いのことを考えている時間より、クライアントの悩みと占いをつなげる努力をします。すなわちどこか、つなげるといふと、相手のことなど知らないのに、どうやるのですかとなります。そう知らなくても良くて、クライアントの問題を他人事ではなく自分事に置き換えて考えてみます。悩みについてカードをひいたとき、占いする人にはどうやって見えているか、その絵を見たときの感覚こそが大切だったりします。タロットカードでいうと「太陽」これは名前のように太陽が描かれていて明るくて成功しそうなカードです。同じ太陽でも、子どもが感じる成功と大人が感じる成功は違うのです。

自分ではわからなくなるのがクライアントのなりたい姿です。必ずしも、クライアントが言っていることや質問がクライアントの心が求めているものと一緒とは限らないのです。もつといふと、まったく違っていることだってある。「離婚したい」と話していて、どうやって離婚できますか。と占いしたらカードは批判的な出方をするかもしれません。なぜならばそのクライアントが本当に望んでいることはまったく違ふところにあるかもしれないからです。

ここで必要なのは、占い師でもクライアントでもない自分。それを用意します。簡単にいうと第三者。客観的なクライアントのような人を意識してあげます。占い師自身も先生だからしっかりこの問題に答えなきゃなどと思っていたりするとつい自分の意見を取り入れたりしてしまうものなのです。それで失敗してしまう占い師さんをたくさん見てきました。3名以上で待機する占い館に出るのも悪くないかもしれませんがね。

この場を借りて私にもちよつとした夢がある。私には尊敬する方がいる。彼女は青森県にお住まいでおにぎりをにぎって自殺志願者を泊めてあげて自らにぎったおにぎりを食べてもらう。ただそれだけで自殺することを思いとどまるといふ。なんということでしょう。心が感じる悩みは心理カウンセリングでしか助けられないと思ひ込んでいましたから衝撃でした。

貧乏から学んだこと。お金があるときに学んだこと。どちらも同じうんこをするのだ。なんてことを考えていても、誰に話しても共感はないので一切を封印しておりました。今回出版のお声かけをいただき、ひたかくしにしていたこの思いや考えを書いてみていいのかなと勇気をいただきました。この出会いに感謝しております。

なぜ私のような未熟者がこの場で本を書こうなどと思ったかという点、たくさんの人と出会い、占いや心理、催眠療法を学ぶことを通して、同じものでもものどらえ方や考えが違っていると知ったからです。自分の共感されない感覚があってもいいということ。軽く自己満足の世界があってもいいんだと知ったからなのです。この本を読んでスッキリしていただきたいと願います。